

ベッピン・ハードボイルド

宇加谷研一郎

赤坂のBARで新しくはじめたサービスが、常連に大人気らしい。

なんでも、甲子園でウグイス嬢をつとめた女性が、店内ブースに設けられたマイクで、名前を呼んでくれるというのだ。俺がその話をきいたのは、その店の常連のひとりで、俺の仕事における取引先でもある男と、久しぶりに会ったときだった。

その日、俺たちが互いに所属している会社同士の交渉は決裂し、今後は商談さえ行うことはないだろう——そんな厳しい会議があった日で、会議室では熱い議論がおわったばかりだった。

社員たちそれぞれが、コノヤロー、コンチキショー、という言葉をごつと飲み込んでそれぞれの会社のグループごとに退室していくなかで、俺と、その男は二人窓際に、中学生が休み時間によくやるように、だらしなく座り込んでいた。

「最近、赤坂に飲みこないだろ」

「ああ」

「どうして」

「どうしてだろうか。俺も世俗にそまってしまったんだ」

「爺さんと、むさくるしい学生アルバイトの店がダメになったかい。いまさら、おねえちゃんか」

「どうなんだろう。ハードボイルドごっこに疲れたのかもしれない」

俺が「ハードボイルドごっこ」と言うと、相手の男も、視線を窓の外にむけた。空からは、丸の内の雲がみえて、その空の澄みきった青い色調は、小津安二郎の映画のそれとたいして変わっていなかった。俺は、空ってハードボイルドだ、と思った。

「いやあ、おまえのいうとおり、みんながみんな、ハードボイルドごっこに疲れたのかもしれないな。実は今日、おまえに伝えたかったかのは、あの店も、ハードボイルドをやめてしまったってことなんだよ」

「どういうことだ」

「最近、入ったアルバイトがね、ベッピンなんだ」

ベッピン！

男が、ベッピン、と口にしたときの目をみていると、俺たちのハードボイルドごっこは、まだ終わっちゃいないな、と思った。

「ベッピン……か。その女は」

「ああ、ベッピンなんだ。それでな、新サービスっていうのは、このベッピンが、名前を呼んでくれるのだよ」

「なんだそれは」

「だから、名前を呼んでくれるんだ」

「そんなことは、どこでも普通じゃないのか」

「それがね。そのベッピンさんは、甲子園でウグイス嬢を5年務めていたんだってよ」

俺は、ふと、煙草を吸おうと思ったが、そういえばずいぶん前に、やめていたのだった。頭のなかで、ベッピンが俺の名前を、呼んでいる姿とその声を想像してみた。あの広い大甲子園。五万人ちかく集まった観客たち。たった一球のボールと一本のバットのやりとりを、灼熱の太陽の下で、汗をかきながらみている。これほど非効率な情熱というものがあるだろうか？ 甲子園の高校野球というのは、なんてハードボイルドなんだろう。

「おい、おまえ興味もっただろ」

「ああ」

「俺も最初は意外だったんだな。憧れていた貴婦人が送ってきたメールが顔文字連発だったときのようにショックを受けたんだ。俺たちの唯一の憩いの場だったろ、赤坂は。どんなに時代が動いても、俺の爺さんがガキのときから、ちっとも変わらない二代目のオヤジ、時計の針がとまってしまったあの空間。ウイスキーは未だにホワイトホース。そんな店が、扉をあげたとたん、ベッピンの透き通る声で、いらっしゃいませ、だ。なにが、いらっしゃいませ、だ。俺もそう思った」

「だが……その女に、名前を呼ばれたとたん……だろ？」

「ああ。おまえも一度顔をだせよ」

俺は、その日の仕事におけるノルマをこなした。数年前から進められてきた社内完全デジタル化は確実にすすんでいて、いまでは社員に普及された電話にはGPSがついている。勤務中に誰がどこにいるのかを、人事部が常に把握している。社内でのパソコン操作は誤字脱字まで、すべてのキー操作が記録されており、過剰なウェブサイトへのアクセスや、業務と関係のない単語が必要以上にうちこまれた場合も、即座に人事部に連絡がいくようになっていて、業務中の無駄を徹底排除するという世の中になってしまった。

全社員禁煙が徹底されていて、煙草もやめた。この調子では、酒も全社員禁酒を言い渡されるかもしれない。これほど監視されている毎日のなか、分刻みで毎日業務日誌を提出しなければならない人生において、退社後にまで、自分を硬く保つことに疲れてくる。

爺さんがしかめっ面をして、客なのに叱られに通うような赤坂の店へ顔をだし、周りに集まってくる皆が皆、同じように無口で、だまって酒をのみつづける男たちのなかで、ひたすら飲み続

けながら、酒で会話を交わすハードボイルドな時間より、よくわからないままに、子供がいたとしたら俺の娘くらいの年の女たちが、黄色い声をあげ、その言葉の意味もなにもかもが耳を通りすぎていくなか、バカになって、知りもしない流行のSONGを女の子たちと歌っているほうが、どれほど、気が休まっていたらう。

俺はその日も、社内コンピューターにメールで業務日報を送信し、現代科学によって洗練されたシステムによって即座にくだされる本日の勤労評価を数字でうけとり、やはり「努力が足りません」とコンピューターは冷酷な評価をくだしてきた。俺は女王陛下に仕える007のことを頭の隅にうかべ、或いは、姫や殿さまを命をかけて守る、というようなボディガードたちのことをうらやましく思った。俺は誰に仕えているのだから？

それでも丸の内から赤坂へ向う道すがら、俺の曲がってしまった背中が、すっと伸びていた。一度伸びて、わざと背中を丸めて歩いていた。曲がった背中と丸めた背中は、ちょっとちがうのだ。店にたどりつく。あいかわらず汚い店だ。ドアノブにつかわれているソクラテスの彫刻は、いまでは、ソクラテスが喜ぶほどにたくさんの手垢によって汚れきっている。すこしも掃除をしようという気がないこの店のスタイルの前で、俺はもう一度自分の心のハードボイルドに火をつける。

最近はおねえちゃんの店ばかり行って、にやけきった能天気な表情だった俺にも、まだ深刻なふりをすることくらいはできて、そうしてソクラテスの顔面に手をぶつけて扉をひらき、店内へ入っていくと、

「いらっしやいませ」

その声を聴いて、俺はしばらく無言で立ち止まった。バーカウンターのなかに、あのマスターはあいかわらず時代おくれのスタイルを保ったまま無表情にグラスを磨いている。そのとなりに、たしかにベッピンな女が俺のほうをみて、にっこりと微笑んでいる。その微笑より、その声だ。

俺は、きよとん、と突っ立っている。ベッピンも、そんな様子には慣れきっているのか、とくに反応することない。ただ、一目、ベッピンのほうに視線を戻せば、その微笑には少しも迷いもなかった。晴れた丸の内のビル街から眺める、小津安二郎が撮った青空とおなじように、この笑顔も、永久不滅なんだ、と俺はおもった。

「谷口くん」

愛想のないマスターが俺と目をあわせることないまま、よびかけてきた。それと同時に、気配をかんじさせず、舞台装置のように沈黙したままラムを飲んでいたらしい常連の一人が、ちらっと振り向いて、

「あんた、何番うちたい。守備は、どこがいい」

と聞いてきたのだった。おそらく、今後この質問が、この店の入店資格となるだろう。何もしらずに入ってきた一見さんは、この質問の意味なんて知らないだろうし、おそらく問い返してもこたえてくれる愛想を彼らは持たない。

「俺、4番、ライト」

俺がこたえると、先の常連はまたチラとこちらを向いて「4番のくせにライトかよ」と呟いた。

そうして、マスターが目で俺にカウンター席に座れ、といているので、俺がすわると、いつものハイボールがでてきた。俺がひとくち、飲むとそれはいつものハイボールの、いつもの変わらない味がした。老いたマスターは、また目で、ベツピンに何かを示唆したようで、まもなくベツピンが店のはしっこへ移動した。そして、マイクのスイッチを押したのか、ブーン、という音がした。

「4番、ライト。たにぐちくん」

ベツピンのアナウンスは一度きりだったが、その瞬間に俺は甲子園にいた。もちろん野球部だったわけではない。俺は柔道をやっていたからだ。だが、野球が好きな少年ではあった。甲子園にみにいったこともある。まさか自分がその場にたつ可能性だってもっていた少年だった、ということについては考えたこともない。

だが、俺のアナウンスがながれたときに、俺はたしかにライトに高くあがったボールを見上げていた。大観衆の視線がつまった白球が、俺のグローヴにすぽん、とはまる。しばらくジーンとして、俺は何も反応できなかった。だがそもそも、この店はもともと、誰も口をきかず、誰も干渉せず、いつもボーッとしているのがこの店だった。

俺はいつものように、無言でハイボールを飲み、さきほどの常連もラムを飲み続けていた。ベツピンは、いつみてもかわらない微笑をうかべていたが、そのかわらない微笑、それもまた、かわらないものはすべてハードボイルドなのだった。そのうち、何人か常連がきて、そのたびに、店内アナウンスがながれた。無口な老いたマスターは、アナウンスがはじまった瞬間、ちょっと頬がゆるんでいるようにみえた。俺たちはみんな、黙っていたが、そこにはハードボイルドごっこではない、なにか本物の沈黙があった気がした。